

「ふれあい新聞」40号発行によせて 併せて「御南」の語源

このたび、10月発行の「ふれあい新聞」が40号になると伺いました。年4回の発行でしたから、町内会がこの新聞を作り始めてちょうど10年ということになります。

10年一昔と言いますが、年月の経過の早いのにあらためて驚かされます。

はじまりは、昭和62年でした。当時、御南中の南の技能開発センター（現在は、ポリテクセンター）に勤めておられた井出正成さんが、用紙代だけいただければパソコンとコピー機で印刷をしてあげますと言われ、はずみがついたのでした。このことは、かねてからの念願でしたが、印刷に相当の費用がかかることを心配してふみきれなかつたのです。井出さんのご厚意は全く渡りに舟でした。

名称を「ふれあい新聞」としたのも、7組の林さんの提案が採用されたからでした。井出さんが転勤になられて心配しましたが、町内の方にワープロを打っていただき、印刷は上中田さんのコピー機を使わしてもらうことで何とか継続できたのでした。

現町内会長になりましても、新聞の続行に格別のご心配をいただき今日にいたっているわけで、ありがたく思っています。

この新聞の第1号で“御南”ということばの解釈を書けと言われて書いたことを覚えています。他所から転入してこられた方々には、この“御南”をどう読むのか、その意味もわからないらしいのです。考えてみれば最もなことです。最近でもこの町内に転入してこられた方も（この5年間で世帯数が2倍になっていてびっくりしているのですが）「御南中学校」「御南小学校」「御南西公民館」という字や言葉にぶっかるわけですから、同じような疑問をもたれることになりましょう。したがって、また同じような質問を受けます。そこで、この際もう一度、編集者の了解を得て、“御南”ということばの由来をつぎに書き添えさしてもらうことになりました。

明治のなから頃まで、岡山城下町の西南一帯のこの地方は御野郡（みのごおり）と言われていました。御野郡の北に津高郡（つだかごおり）が接していたのです。そして、明治33年の郡制施行を機に県内の郡が統合され、御野郡と津高郡が合併した。その際、両郡の頭文字をとって、御津郡（みつぐん）となづけられる。御津郡は、南北に長い郡で北端は真庭郡に接していました。このため、岡山市に近い牧石村以南の村々は「津高郡南部」として内輪の交友圏域ができていたのです。例えば、南部の12小学校で、スポーツの対抗試合が毎年行われたように。

戦後、新制の中学校ができことになりましたが、この地区では、当時生徒数の関係で、今村・大野村・芳田村の共同の「御南中学校」が設立されたのです。校名は、

御津郡南部4か村の知友学校という意味をこめての命名でした。しかし、その後この4か村は、昭和27年、同時に岡山市に合併した。また、人口と生徒数の増加に伴って、旧白石村の白石地区や旧大野村・旧芳田村は別の中学校区として独立し、または他校区へ編入したので、残りの校域では“御南”という言葉の意味と実態がそぐはなくなつたかも知れません。いいえ、そうでなくて、もう牧石村ほか御津郡南部の全村が岡山市域になっていて、「御南」は死語だと言わざるを得ないでしょう。しかし、西小学校の分離校も「御南小学校」を名乗り、新設の「御南西公民館」にこのような名称がつけられたのも同一中学校区内なので、やむをえないのではなうでしょうか。

その「御南中学校」も創立50周年を迎えると聞きます。そうです、過去のいきさつはどうであれ、もう“みなん”はこの地区の代名詞になったと考えてはどうでしょう。そして、この地域の過去の歴史の面影をわずかでも残す、この“みなん”ということばには、私たちにとってもなつかしい思い出がこめられているのです。小さな「ともしび」ですが、“みなん”的の火が消えないことを乞い願ってやみません。

平成8年10月号 第40号
(中 尾 佐之吉)